

「貧困ジャーナリズム大賞2020」

授賞式&シンポジウム
「コロナ災害と貧困報道」



反-貧困

ANTI-POVERTY CAMPAIGN

日時：2020年11月26日（木）18:30～20:30

場所：文京区民センター3A

主催：反貧困ネットワーク

162-0822 新宿区下宮比町3-12

明成ビル302市民プラザ内

TEL:090-1437-3502（瀬戸）

FAX:03-5225-7214

HP: <http://www.hanhinkon.com/>



プログラム

18：30～19：00

「貧困ジャーナリズム大賞2020」授賞式

- <司会> 白石孝（反貧困ネットワーク 世話人）
<選考経過説明> 河添誠（反貧困ネットワーク アドバイザー）
<プレゼンター> 宇都宮健児（反貧困ネットワーク世話人代表）

19：10～20：30

シンポジウム「『コロナ災害と貧困』

- <コーディネーター> 竹信三恵子（和光大学名誉教授・ジャーナリスト）
<パネリスト>

「貧困ジャーナリズム大賞2020」受賞者

※会場内において、受賞作品の展示を行っております。ぜひご覧ください。

※受付では、反貧困ネットワークのグッズを販売しております。ぜひご利用ください。

「貧困ジャーナリズム大賞2020」受賞者一覧

貧困ジャーナリズム大賞

沖縄タイムス 篠原知恵、又吉嘉例、嘉数よしの、勝浦大輔 連載「『独り』をつないでーひきこもりの像ー」

内閣府の調べでは、わが国における15歳から64歳までの「ひきこもり」の人数は115万4000人と推計されている。ひきこもりが長期化・高齢化する中で、80代の親が50代の子どもの面倒を見て生活困窮に陥る「8050問題」は深刻な社会問題となってきた。しかしながら、ひきこもりは本人の努力不足や甘えの問題、親のしつけの問題とする「自己責任」「家族の責任」を問う風潮が強いため、本人や家族の多くは社会の中でひっそりと身を潜めて暮らしているのが現状である。また、これまで国や自治体もひきこもりの問題を重要な社会問題として直視してこなかった。

沖縄タイムス社の本報道は、長期間にわたる取材の中で本人や家族、支援者らとの信頼関係を築きながら、口をつぐみがちな本人や家族の声なき声を拾い上げ、これまで分かりづらかった本人や家族が直面する厳しい現実と苦悩を「当事者の目線」で伝える報道である。本報道が、同じような問題を抱えて悩んでいる全国のひきこもり当事者や家族を大いに励ます報道になったことは想像に難くない。また、本報道をきっかけに、官民連携した「ひきこもり家族会」の発足や自治体においてひきこもり支援体制を強化する動きが出てきていることは、マスコミ報道の重要性と役割を改めて再確認させるものである。

貧困ジャーナリズム特別賞

あらいびろよ

コミック「虐待父がようやく死んだ」

DVは、女性の貧困の温床とも言われるが、その実態を伝えることは簡単ではない。本作品では、DV被害家族の子どもの視点から、その深刻さと影響の過酷さをえぐり出し、一般の人に広く受け入れやすいコミックエッセイという形式を通じ、リアルにかつユーモアを交えて描かれている点が高い評価を得た。自らの体験を呼び戻すことのつらさに直面し、血のにじむような思いの中で書かれたと推察されるが、当事者ならではの作品の力に励まされるDV被害家族も少なくないと思われる。

映画監督 隅田靖

映画「子どもたちをよろしく」

子どもたちが現代日本社会の中で直面している困難を正面から社会に問う劇映画である。企画には、元文部科学省官僚の寺脇研・前川喜平氏が参加し、隅田靖監督が劇映画として完成させた作品で、ドキュメンタリー作品とはまた違う迫力をもったものとなっている。貧困、虐待、いじめなどが、子どもたちを痛めつけていることをリアルに描く。このリアルさは、現場をよく知る者でなければ描き出すことができないものである。こうしたテーマを劇映画として制作・劇場公開することの困難は容易に予想さきが、にもかかわらず「子どもたちを守らなければならない」と果敢に完成させた制作側の強い意志にも感動する。

貧困ジャーナリズム賞

中国新聞 栞暁雨（らん・しょうう）、林淳一郎

「この働き方大丈夫？」

第1部「われら非正規ワーカー」、第2部「結婚・出産遠すぎて」、第3部「テレワークのうねり」、第4部「パワハラが怖い」、第5部「非正規公務員の嘆き」シリーズは、さらに第6部へと展開しているが、今回は2019年12月18日から20年10月3日まで完結している5部を対象とした。各部5回の本体記事は広島県内でのインタビュー取材で構成、データを見やすく掲載、識者のコメントも多く盛り込み、読者の反響もきめ細かく掲載し、読者にいまの「働き方」のあり方を考える長期シリーズになっている。

ドキュメンタリーコレクティブDocuMeme（ドキュミーム）

（松井至、内山直樹、久保田徹、平野まゆ、中川あゆみ）

NHK BS1スペシャル「東京リトルネロ」など

3月から9月の半年間、「コロナ禍の東京で社会の片隅に生きる人々の小さな歌声（リトルネロ）に耳を澄ませた記録」として10月11日に放送された。政府及び東京都は緊急事態宣言などでコロナウイルス感染拡大を抑え込もうとした。一方、社会の底辺では仕事を失い、住まいをなくした労働者、「夜の街」と指さされた歌舞伎町、難民認定申請し仮放免のクルド人、そして反貧困ネットワークの瀬戸大作の「日常」を描いたドキュメンタリー。

小原美和（NHKプロデューサー） 後藤秀典（ディレクター） 長塚洋（ディレクター）

NHKテレビ番組「分断の果てに“原発事故避難者”は問いかける」

2011年3月の東電福島第一原発事故後、埼玉県に避難した避難者のその後を追っている。原発事故のもたらした困難は、現在に至るまで続いているのだが、被災者が全国にバラバラにされてしまっているために、その生活困窮の実態は十分に明らかになっていない。原発事故避難者の相談活動を継続しておこなっている市民団体の調査活動も紹介しながら、避難者自身の声を集めて番組にした意義は大きい。けして忘れてはならない原発事故の避難者がコロナ災害の下でいかなる状況にあるのかを報道した意義は大きい。

NHK 青山浩平

ETV特集「調査ドキュメント～外国人技能実習制度を追う～」

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の下で、外国人技能実習生が仕事を失いどのように追い込まれているかを丁寧に追ったドキュメンタリー。食べるためにウシガエルを取っているベトナム人技能実習生の映像が冒頭から流れて衝撃的。国内での人権侵害的な働き方だけでなく、ベトナム現地での送り出し機関を取材して、そこでの人権侵害的な仕組みも追っていることは特筆されるべき。長い期間をかけて取材されたすぐれたジャーナリズム活動である。

毎日新聞 上東麻子、塩田彩、宇多川はるか

連載「やまゆり園事件は終わったか」

「やまゆり園事件」は、犯人が優性思想的な考えを強固にもちながら起こした大量殺傷事件として社会に衝撃を与えた。この連載では、事件がなぜ起こったのかの背景を追っている。やまゆり園の中では、居室施設や身体拘束が頻繁におこなわれていた事実を明らかにしている。こうした人権侵害が大規模施設の中で起きていたことなど、構造的な問題として指摘している。一つの事件を終わったものにせず継続して取材することによって明らかにした事実は重い。

神奈川新聞取材班（佐藤奇平 田中大樹 高田俊吾 成田洋樹 石川泰大 川島秀宜 山本昭子）

神奈川新聞取材班 書籍『やまゆり園事件』（幻冬舎）などを中心とした報道について

相模原事件の起きた地元紙として、4年間にわたる取材を続け、植松死刑囚と37回接見をし、裁判が始まってからは日々法廷の様子を詳しく報道し続けてきた集大成。事件の背景や植松の人物像に迫るだけでなく、社会に根付く優生思想や、その中で「共に生きる」実践をする人々に迫り、読む者すべての「内なる優生思想」に問いかけ、揺さぶった。本書だけでなく、相模原事件に関する一連の報道にも敬意を表する。

テレビ新潟報道部 加藤頌子、捧美和子、芝至、須山司

テレビ番組「桜 SOS ～フードバンクと令和の貧困～」

新潟県新発田市の「フードバンクしばた」は、経済的に苦しむ家庭へ定期的に食料品などを支援している。現在、フードバンク事業のほか、就学支援事業、制服、学用品、生活用品の各リサイクル事業も取り組んでいるという。映像にでてくる土田さんが1世帯ずつ宅配しながら、様々な困難を聞きながら向き合う。人々の善意で拡大してきたフードバンクが、福祉事務所や社協などに相談に来る困窮者に「この食料で繋げ」と安易に使われている。「フードバンクしばた」は食料宅配を通じて、利用者と共に悩みながら、伴走していく姿が見事に描かれている。

朝日新聞 白石昌幸、山田佳奈

「内密出産 国は動かず」

コロナ禍の下で、若い女性の望まない妊娠が増えているといわれ、追い詰められた女性たちによる子どもの遺棄も社会問題になっている。女性の貧困が問題化する中、このような女性たちへの支えの整備はいま極めて重要なテーマになりつつある。この記事では、虐待を受けて育った19歳の女性の予期せぬ妊娠事例を紹介し、その出産を阻むものを明らかにしつつ、こうした女性たちを支える制度や法の不備について多角的に取材した。女性の貧困の温床となりがちな状況を改善させる役割面からも、先駆的な報道として評価された。

ジャーナリスト 藤田和恵

「『コロナで失業』40歳男性はなぜ派遣を選ぶのか」（東洋経済オンライン）

「このままだったら、死んじゃいますよ」新型コロナウイルスの感染拡大につれ、仕事はなくなり、所持金はゼロに。水道水を飲んで空腹を紛らわせる。新型コロナ災害緊急アクションに届く20代から40代からのSOS、支援者に密着同行して、多くの当事者が、いったん貧困のワナに陥ると抜け出すことが困難な「貧困強制社会」の犠牲者であった事を突き止める。東洋経済の連載「ボクらは「貧困強制社会」を生きている」つまり男性の貧困の個別ケースにフォーカスしてレポートし続けている。

東京新聞 中村真暁

「足立区生活保護とりやめ問題」

足立区が、生活保護の利用が決まっていたアフリカ出身の日本国籍男性が失踪したとして、男性の生活保護をたった4日で打ち切っていた件で、区が「誤った対応だった」と取り消し、男性に謝罪した。足立区は当初、非を認めなかったが、中村記者が真実の背景をスクープしてくれた事が謝罪につながった。取材現場で記者なのに誰よりも怒り、涙を流す中村さんの姿を見てきた。

貧困ジャーナリズム大賞とは

「反貧困ネットワーク」は、ひろがる「貧困」を最大の社会問題として位置づけ、それを解消するために活動する人間同士のネットワークです。

日本において貧困に関するジャーナリズムの関心はこれまで必ずしも高いものとはいえませんでした。ともすれば一面的、感情的、あるいは官庁発表垂れ流しの報道が繰り返され、貧困の実態に関する人々の無関心や無理解、誤解・偏見等を招いてきました。他方でイギリスをはじめとする欧州の国々では、貧困をめぐる報道は日常的に多様な形で行われています。

そこで私たちは貧困問題への理解と意識を持ち、正確にかつ継続的に報道するなど、顕著な報道活動を行ったジャーナリスト個人を対象とした「貧困ジャーナリズム大賞」を設けました。その活動を励まし、社会にもアピールする機会にしようという意図です。フリーの人でも、組織に属している人でも、実際に取材して表現する活動をする「個々のジャーナリスト」を対象とした、ささやかな賞です。

あわせて報道の成果である「記事」や「映像作品」などに一般の人たちが触れ、貧困報道への関心を高める機会にすることもこの賞の目的です。

<これまでの大賞受賞者>

2019年

NHK 長嶋愛、村井晶子

E T V特集『静かで、にぎやかな世界～手話で生きる子どもたち～』

2018年

青山浩平・真野修一（NHK）、青木美希（朝日新聞）、渡辺周編集長ほか「強制不妊」取材班（ワセダクロニクル）

2017年

該当作品 なし

2016年

錦光山雅子（朝日新聞）

2015年

我那覇圭（東京新聞 政治部）・林朋実（東京新聞 社会部）

2014年

みわよしこ（ジャーナリスト）ダイヤモンド・オンラインなどでの一連の生活保護報道

2013年

風間直樹・西村豪太（週刊東洋経済 記者）

「ユニクロ疲弊する職場（週刊東洋経済 3／9号）」

2012年

朝日新聞被曝隠し問題取材班（代表：佐藤純）

原発労働に関する一連のスクープ「線量計に鉛板、東電下請けが指示 被曝偽装」など

2011年

水谷 豊（俳優）・櫻井 武晴（脚本家）

テレビ朝日 ドラマ「相棒 Season 9 ～ボーダーライン」

2010年

与那嶺一枝（沖縄タイムス）「生きるの譜」

2009年

竹信三恵子（朝日新聞）

労働など雇用問題を継続、かつ、多角的に報道した実績に対して

2007年

清川卓史（朝日新聞）

日雇い派遣問題などで先鞭をつけた、朝日新聞における一連の報道に対して

風間直樹・岡田広行（週刊東洋経済）

クリスタル問題などで他の追随を許さぬ、週刊東洋経済などにおける一連の報道

